和訓栞

須之部

十二

津田文庫
文庫1
1604
13

倭訓栞前編十二

須の部

洞津　谷川士清　纂

寸　為字をよむハすなはち又せる反せん反也將字をよむも同しまちえたとよみて再讀をなすハ欲然也と注す云ひなるへし且も古文に見ゆ韻句をよむとも東漢已後多し○いふれきかを詠万葉に令言令聞と書りおもむ反すなり又らせるけれの動詞をなしすせそせふけ日ハ皆今はさなりといふ○不ハ濁りてよめりざる反之又ぬと同韻也未ハ已の反對也弗ハ不之深也と公羊傳に見えたり又匪と弗は字義とするをさはなり夙夜匪解匪用其良此類是也匪弗ハ音之轉也といふ匪ハ非也推古紀憲法に非齊非同と見えたるもまた不齊不同と云て看へし古事紀にハ勿を不字をもて用ゐたり○助語ふといふ伊勢物語に秋も明なんずと思ひといふが如しぞと云り○後撰集に桜もひきわるなもはまんなりぬるをやうし採もやも咲なん見も桜も引ぞなど菜も摘ぞ此さ兩句を貫きたるを云り不飲酒食

肉といふの物語はいとさかしき詞なれども○本紀まに
にはくろうるぶ物はまぐらの事なりすとゝいふ素は酒音也とゝとすぐれ略
なりくゝ又ひすきをいふいふ徒手の事徒手ハ空手也又無益はさる
いふ徒仁徒法の徒をすとゝ○酢ハ酸の義也神代紀ハ酸もよ
ゝり酢はあまりとゝいふ本職人所合はゝりゝ酢はもゝゝりゝいふ徒也
鴨長明ハ所はゝりゝ万年醋ハ菖蒲醋あり六月醋ハ和泉酢ハ建
長二年記小和泉郡御酢荘貢酢とゝ今も酢垣内は名存ゝり○陸奥松
嶋ハ三里はゝる本とゝいふ酢ハ砂ハ味酢はゝゝ地中ハ
砂礫あるとゝ○結ハ結ハ○物ハ物はそゝいふ子は音轉也扇子葦子鑵子は
○簀ハ透はゝ簾はもゝけ簀ハ同ゝ○簾をすゝはゝいふゝ多ゝ
後式帳ハ前簀とゝいふも是もゝ又麻簀葦簀なとゝ○稟ハ栖は家ゝ
栖をすとゝはゝもあり○物は中は虚なるとゝいふも稟ハ物ゝ
鬆字はゝ○例をもむいはゝゝ反音ゝ其證古事記はゝゝ○渚をもむ
ゝ例はゝゝ○端をもむい古結拾遺ハ安河原を端河原とハ端はゝ

せゝと通音也○祇代紀ハ沙をすとゝあるハもゝ略
△すゝ　日本紀ハ徒跣をあり生足といふあり
すあう　素襖の音也とゝいふ源氏はすあをとも見ゝゝ布を用ゐて唐綾
乃襖ハ對しゝる名とゝいふ大双紙はもきすゝゝハ紙後ぬのを浄るとゝいふ
とゝゝゝゝ又射手すゝゝ九すゝゝゝゝ懸素襖ハ略く袴ゝく烏帽子色
○大坂ハ元禄の末まで庶人の葬禮ハ素襖を着ゝ対ハ奉行禁ゝ也ゝゝ
△ずいじん　吏學指南ハ断約年月賃人指使者名曰随身即今典雇身良
人也とゝゝゝゝ舍人也劔を帯し弓箭を持く供奉ゝる者をいふ○随身
所ハ攝家清花家大將經歴の家ハ必ゝ三方ハ腰懸ゝゝ武家管領職の
家ハ鞦所ゝゝハ此準據也とゝ○小随身とゝいふハ本府の随身は外中少將
左右衛門兵衛等は石仕小随身とゝゝ○口語はゝいとゝゝも文字ハ同ゝ
△すう　日本紀ハ鎮坐をもゝ雑居をもぜすゝとゝあり
閑るあく暫ゝゝゝゝ假名あるくゝ
△すえ　日本紀ハ酸鍼をすえゝゝとゝあり酸味を生して損敗る

なり倭名抄に冷酢をひいまゆるとあるも同し

すえず　八雲抄に楚を訓せり直枝に見なるへし

△すがら　人に酢をとらせ論語に微生高の舊事を直に借とする説へし

△すぐ　清をあり神代紀に清々しとあり清地も訓同し

○菅をむしもぐくしきをもとらせ清地に見なるへし○蜓金もぐと云

すがら　紀に数をすがらとみ古語拾遺に大数をがらと云て續日本

紀に数をがらとあり新勅撰集に夕すがらとみえ万葉集に夕すがらせる

乃すがらも篇り古事紀に夜やくとあるは

をがらすがる也すがるハ闌字乃義と韻に闌盡也と云とあり

らぐとも訓せり多れ説考合をへし分をがらとあり須も同を説へし

をがる　あれ来りなりそとあんとする説すがらとあり未枯に見説へし縋字を

あるもさ家なり金葉集に嘉吉をがらぬ草に見るもの〜とあり蜜囊

うるらすがらとひ字治拾遺に杖にすがりてとあるなどあり倍乃

すうの語義集に乃之或に須我流横力(ヨコチカラ)の柄以鵜

羽纏之とあり一説に柄頭とあるかて窠の鍔を掛るをハ鳳凰也とあり

○日本紀に螺蠃を訓せり細腰蜂也とあり万葉集に腰細をとがる娘子(ヲトメ)とよ

めり倍語に蜂をとんがりとあり是も古今集にすがるの枕に萩原とあるハ此

出也後人鹿とあるもの多し誤なりと云倭名抄に蜂を訓

せりけりをとらるも以常陸に云ハ仙臺にすがりと云○香花をがりハ香を尾燈と見てとあり

すがめ　倭名抄に眇をすがめ新撰字鏡に眺をすがめ目ある

平忠盛の眇なりしと酸甕に見なるすがめ目ある

とあるをめつとあり矯つ直めけりの義なるへしまた先ぶるは一目

眇にする方なりや天目一箇命の名も本匠の称なれハ此義也と云

すがる　万葉集に光儀をとみ為形をもとり訓義新撰へし日本紀に容

儀威儀をも訓せり為り姿をとる説に質も同し海人藻芥に舞装束に附ハ

髪をびんばらり結なりとあり乃とりハすがるとて金をおりとる

はをつくることとなんとう

すがの　新よせもがの音どうありがの反ぐ生次はえ家なりすぐは清ぐし源氏り
和ものびとも之の顕昭説よいもがのとは同しつぶさとあり〇姓よりは菅生とか
あり河内はは名と

もがそ　菅と麻とと又清麻はえ家とも以て一説よ菅とハ針ハ割ゆゑとい
ふなり注古事記の次第ハ賦菅取割次第返とえとうり

中臣はは天のもがそとかとそぎわし神ハあるのたゆこそ

孫姫式よ裂菅麻而禱神終得樂於今日とえとうり菅と被よ用ゆしハ萬葉
集よさとらは小野の七相菅手よ取持て潔身(ミソキ)て海一流とえ又菅根取てを
はふ草解除てまとえて祓ふ新新ふなるとみの天はは小菱とさはそとひと
なりて割る菅と手よ取て塵と拂ふとさとやしなり〇菅畳はそハ凡て割て作る
物の名と真蘇木綿のそも同し被よハ必割て用ゆハすとそとふ

すがぐさ　新よれ孫なるもぐるかとそとあるハ菅垣如へし〇筆はは譜よ
いとハ清撥の家なるし蘇合香乃樂よもがとはは説とうとなりと伝源

抑よえとうり源氏よあがまはもがとえとは花多よ和琴よ菅攪片攪
とは神樂催馬樂よ用る事ありとうり

すがぬき　菅貫と書り茅輪とは輪二丈六尺圍八寸藁とは造り茅と心と
紙とは纏る若し内侍所の調進ハ茅はは用とは法性寺入道殿下六月
被詩よ未知何物号菅抜結草如輪令首蒙とえて宝治百首よ

わそはまとあはくとはのそよはひてあるらすぬきみとはとうん

すがる　新撰字鏡よ嘻囉とえとあり又さくしとあり心中不悦樂
貞とも坐歎貞とも注せり不好はとさとや

△すき　日本紀よ耜字鉏字鍬字鏵字等はあり新撰字鏡よ鍤とうみ鍪也と
注せ又鎌とうみ鎡也と注せり古事記はは奇よはとはとあり天治よは
鍬一ツとあ人とは把てもく柄ハ木はは枝のかし毛耦耕ゆとはうとは撈(ヲヂ)上る器
也とは名とす〇俗よ嗜好とすとはいとは花どとは毛なり〇日本紀よ
次字とすとはとあり〇すとは大食とはハ朱器也〇玉篇よ注也
すぎ　杉と訓せり新撰字鏡よ椹とは日本紀よ榲とはとあり集韻よ杉也

とみゆ直にすぐなるを杉の名とするなり万葉集抄にみえたりげにもちら神木
とし正直の表相なり日本紀にも石上振之神榲万葉集にも三諸の神の神すぎ
記などにもみえたり支那にハ叙邦の産なる事合璧事類にみえたり是ハもとより和
の産なりや本草にも倭國にあるものを倭木といふと云せる也神名式にハ榛もよ
めりといへり欅字の誤也訓もぬく謬てすぎとあり又俗に椙字をよむハ三代
実録にみえ椙を謬りたるなるべし○いをすぎなり縁杉也温杉也といふ吉野
杉の上品をいふ杉といふ猿猴杉なり姫杉あり綾杉なり鬼杉なり○安永二
年六月の大風に外宮の杉多く倒れたりしかど杉といふなりて十六かくへなり
といふ○常陸國大田社造營の時杉の神材の中に鹿嶋大明神の文字ありし
右甚分明也よて一ハ鹿嶋に納め一ハ當社に納む其社ハ建速男命建津分命
也○杉なりといふハ杉樹の形の表のみくあるをいへり同じ事に赤飯杉の高
盛とみゆ御杉の御飯ともいへり○神代杉と称するハ箱根の湖の底より
出るをいへり云佐杉なども同じく木理を賞せり掖玫杉ハ酒家の槽に佳とす○
日本紀に村をよめり韓語也すぎとよみえゆ○杉菜ハ詩経の蕢也杉葉

似たり接續字をもいふ筆頭菜ハ此名也○杉の洞ハ叡山にあり杉山ハ相模
國土肥郷にあり頼朝石橋山の戦に敗走せし所也
すぎハひ　生業をいふ世をすぐるわざの義也西土にも過活といへり生理生意
常業活計も同じ鄙言に口すぎともいふ
すきごこと　後撰集伊勢物語源氏物語にみゆ好色をいふ好事の義にもすきを
ものといふも同じ古説に拠て好むをすきといふ新撰字鏡に僭をすけり
ともかくるはもとのめり一說に数奇事の義なるべし性質の偏僻なるを数奇
者といふと同じといへり濱成筆記にも数寄人とハ秀人也とみゆ数寄
は史の李廣傳にみえて命数の耦せざる時運をいふめり白氏文集
にも文人数奇詩人薄命とみえたり○伊勢物語のすきごとひたる女を生
名すには椙子とかきしハ齋宮にみやづかへせし女の名とみえたりされど下文に
私言といへるハ源氏に内侍のすけのといふ中納言の君のわさとらし二代
やうかそえて奇なり
すきかへし　天工開物に還魂紙とみゆなかにもハ清和帝の御時しきし

内女御藤原多美子出家の時御筆の手書を漉返めさせて経典を
書せられし事史に見えたり是を始めとし十訓抄には反古色紙といひ東鑑
には薄墨色紙と見えたり或は宿紙といふ是也宿を経て成より名とすとそ
すぎまくら　年中行事哥合神今食の哥に見えたり　杉枕にや大嘗會
坂枕の類なるべし
△すく　嗜好をすさむといふ是也哥にもよめり○透徹をいへり直來
の義なるべし○田を耕し紙を漉し網を結ひ髪を梳り魚を捕ふをすくと
いふは皆同じ義なり○日本紀に送飯をおひをすくとよみ新撰字鏡に轎を
ひきくとよめりかの物語源氏物語に松の葉をすきてとありすくふと
もいふ字治拾遺に
むりしてかみて紙のちらひてかゆりと是をはすくふとぞ有
すぐ　直字をよめり○過をよむはすぐる也すぐる反ぐ也○結をすぐと
いふはすげるなりげる反ぐなり
をふ　三代實録に救をいふは助くるより轉せる詞也○施をすくひあぐると

いふは抄取するの事也倭名抄に漉をすくひとるとよみ華嚴経に漉人天魚とて
又撈字をよめり正韻に沉取曰撈言没入水中取物也と見ゆ○窠を倭名
抄にすくふとよむ鳥の窠は口に喰へて作るものなれば云也
すぐ内　過字をよめり直入の義にや○死するを過ぬともいふも是その義也
万葉集にも往川の過にし人また黄葉の過にしすぎぬる事とよめり○世
をかへるとも云も余緒まで過ぐて云る也○神代紀に傑文超
又絶をも過れたるとよむも過たる義にて勝字をもよめり兵家に士卒をす
ぐるといひ農家に蒙をすぐるなどいへるも比さなる也○霊異記に秀を
すぐれとよめり
すく禰　宿禰と書り足とはそく称とみて足禰と書り大宿禰ともいふと
見えたり舊事紀に近宿殿内と見えて又宿禰とも記せり云とかき
釈に稱王子云大兄称臣下云少兄を見たるを思ふべき也武内宿
禰より始めは官名にして後は姓となれり少兄は反すくね反なり
すくやか　健をよめりすくよかとも又すくやかとも又いとまやかともいふ

すぐ　すこし　○源氏　ようしく　しとやかなる　ものなれ　こなす　すくすくと　たちまち　成
海　なる　ものなり

をくなり　少　ものあり　无過の　業成へし　出　まそ　はをくあるといふ

△をけ　相輔佐亮介助　をとこみ　又典侍　ものあり　次　すきさま　ものあり　其
なり　日本紀の　所　今　をけ　ものあり　四等　其次官　といふ　業なり　○
東國の　三分　六上結　上結　掌　法　其　はをは　生　任せらる　例　なる　ものを　下
里　海勢　知り　八分　其　他　其　武家　賜　八　地　信　下
なりて　皆　國守　中　六位　者　國分　也　武家　分　なりて　更　成
ふも　三分　八守　同　是　より　名　ものを　千葉介　三浦介　狩野介　を
なりて　海　大　分　なり　なり　同　事　相　守　忠清
あり　八　を　量　ようて　分　かと　唱　ふ　成　也　といふ　○　倭名抄　楷柱　を
すけ　ようあり　國　なる　し　唐韻　支屋　歌　也　ひ　錢謙益　樹牙類
相楷柱　不少下　とは　ようは　今　れ　結　ところ　なり　ものあり　倭名抄　槐
とは　すけ　をけ　ようあり　も　業　同　し　事　相　結　所　奇　柱　たのむ　をけ　所　し

とあるも同し　盛衰記　多　れ　まろひ　ふ　んぢ　に　は　を　を　柱　は
伐　大きなる　本　を　を　に　へ　なす　事　なり　と　より　○　源氏　より　出家　も　い
屋　り　音　なり

すげ　菅　をむ　はすぐと　毋　をぐくしき　奇　白菅　岩小菅　なり　あり
秘中　も　用　る　ものは　みそぎ　れ　そぎ　すげ　同　語　なり　を　そ　織
ら　ひ　放　る　れ　名　す　絵　名　て　宮　被　を　菅　の　被　と　称　を　より　新撰字鏡
多　も　訓　より　○　黄　をけ　は　仙　茅　也　則　光　黄菅　より　を　を　け　は　菰　草　姫　を　け　は
地　楊　梅　也　又　一　本　菅　あり　○　菅　の　ひら　野　は　信濃
すげみく　口噤　して　舌　強　る　く　源氏　ようち　すげみて　又　いたり　すげ
みる　に　つき　と　る　こと　より

△すご　万葉集　より　葉　つむ　須　兒　も　山田　を　酢　兒　も　ものを　より　賤民　を　より
男女　を　毋　する　名　成へし　すご　は　約　めて　ところ　より　を　を　同　を　年中行事
より　を　こめ　も　ものを　より　葉ツて又児　山田守人児

すごを　延喜式　食　薦　又　業　薦　倭名抄　食　草　を　あり　薦　を　を　ものを　も

ことをいふハそれ義なるべし類聚雜要に簀薦ハ竹を御簾の様に編て生平絹(キヒラ)
を裡に付る也といへり万葉集にすがも敷蔓菁(アヲナ)煮將來(モテ)とよみ西宮記に鋪二
簀薦着物といへり後二条院御製
ちはやぶる神のみまへにすがかけて千とせの津守今もかはらず
大嘗會の義なるべし大饗のはしく忠ち下り志らいをとしめうらつけたる
事あさすけにみえたり
すこし　神代紀に少をよめりすくなし也略成べし○世をすむハ無多也と
通せりまた童蒙頌韻に么もよめり
すごし　和泉式部秋風ハすごく吹ともとひ紫式部日記にすごうす
ずわたるとみえたり凄の字を今も物すごし紀にもすご紀ともいへり○すご
すごと　いふ詞も是成べし○簾越を洲ごし小島てよめる奇語撰集にみえたり
すこぶる　頗字をよめり少しぶる也字書にも頗少也といへり文甚多曰
頗多良久曰頗久鐃有曰頗有とも通せり譯してよれども義となれ
△すさ　墻壁に用るものをいふ砂草の義にや埃囊抄に衦麻をよめり蔦二

こ麻ともいふ紙をくだくといへり○枕草紙に朱砂をすると見り
すさぶ　退くをいふ後坐をいへり火闌(スサリ)降命を姓氏録に富乃須佐利命
と作れり増韻に闌ハ衰也といへり物のさかりを過る事なり
すさむ　荒字をよめり他ハ心のすさむ也源氏にすさびとけし
きすさびえんじ平家物語に常盤御前にすさめられて此さま
さむるの義なるべし○風吹すさむ雨降すさむハ吹も降も荒て衰へて止んとする
といへり閑の字をもすさりとよむなりと云へり
すさひ　源氏にすさびといへり万葉集に吹すさひたつといへり草
とへりすさびハすさぶの義にて同じ口すさび手すさび筆のすさびなと艶び
きなりもすさびハ荒むの義なるべし事にならず荒るゝあらぬ事のなかた
といへりひとつみとおもひて悪しきの事成ハ遊字或ハ翫字をよめり
すさぶ　雨風なとの荒まさり吹まさる折の事に云へり進むと成へし源氏にも
さらぬことゝてものしくすさぶもつまたてもしらうことゝおもひたり
すさめぬ　人もすさめぬ物もすさめぬなとといへり不愛のこゝろにいへり進めぬ也

多なるべし河海より萬葉集を引て本音仮字を填られと集えば須多

すさ海　荒涼さいみまり又みるがはすさみまし海ハ欲字仮字多

長明の奇り

火たきぬ長はもびつの伝信して人もまきめぬるさ海ハ世や

源氏より人はすさ海しさ事ハ多くつの伝信ハ人はすさ海しさ事ハ多くつの伝信

管見紀狭衣枕草紙等ハ人こそ

△す　酸　すあり酸は和名抄に新撰字鏡より醋もすあり吸はれなるべし○倭

名鈔に飡蕪ハ酸模の音ハ羊蹄の義也飡蕪ハ酸模の音ハ羊蹄今ものいとうい

又ものかんがうとふ大抵ものもいとう○酢も鮓も同し味酸し同事

紀り臨もすあり○こけらずしハ本草小玉版鮓と名とあり又魚ハ連子

鮓もすあり

△すく　炻烘とふ倭名抄に見ゆ古事紀に疑烟とあり新撰字

鏡に烘ハ窠炭ハ窠あり窠ハ盧屋たきすしきをひとと見

えたり○神代紀に倭に俊智をすくとふとあり○漢書に

高長二尺ばかりの棒にしすびかりの内いびやうにたるおとをもて

もて夷人あつまれ所他の武士乃兵法を習練するうめくと

すず　鈴　すずしい音の涼しきより名とれたるべし神名秘書に鈴

音字也とあり○神前乃鈴を周禮に大祭祀鳴鈴以應雞人や

乃ゝ後漢三韓伝に建大木以懸鈴鼓事鬼神其南近倭と見し異苑に

廟庭鈴下巫人と見たり○神樂の鈴ハ十二顆を攢簇せり神楽歌

もゝしめ鈴のさなり新撰六帖に八ものの振て鈴のこゑくとよめ

ふもすり○後拾遺に内侍所乃ゝ鈴の音ハめをもく優なるこのもと

徳大寺大政大臣に作られ○西土に納幣とみて後い女に鈴歌

等と見る紙邪乃か糸つけのこと○いふ〳〵乃ものハ鈴をつけ

たる多る釧の鈴手乃鈴足ゆひの鈴大刀の鈴鉾の鈴あり弓弭

に鈴つけるを万葉集に見て古語に鈴六つ緒付るもあり○尾

州中嶋府大國霊神社に古鈴あり大鴻の鈴と云迦ぐる大和平群

邪よりて掘出せし鈴二つ戎横ゐるびりはるれて大さ両掌と合て一箇
ひのりを用ゐ紀に飛のちひさきもあり又板金の鈴五つ長るもなり
○鷹乃鈴犬の鈴を日本紀古事記にてり○酒器にすべといふ
味酒鈴鹿國にてりとは鈴の口乃さけるものなれば真折の云る
ふ伝説して味酒といひしの事多し○錫を訓するを酒器に化
れり名とするなり○續日本紀に白鑞を訓せり賀も同し三才圖會ふ
有銀坑處皆有之とも日本邦も亦同し○小竹の葉をすといふ涼しき
ものや吉野の嶽にすがてもも大なるすゞ吹風とももゝの下ともよ
めるを之神代紀に五百箇野薦とるもは物ゆゑ武伝に薦を
薦の誤り薦は葦を小竹也とす○鈴竹を笹とすゞとひしは風雅集にたろ
むるのかをれをもしわくもはきぐら竹のいねもとをもてとをを古今著聞に
石泉法印鞍馬の別當ふく紙よりすゞを多くぬうけるを武人の深しをもを
ひすゝは鞍馬の福をそもひのゆりうれいをもみひてめさるれ

筍は法とむるを据蚣に考て之り張松は鞍馬の福とひあるこり今白さを
きこりもぐも煤をもてゝあるふや宮は鞍馬の高札を献るもの
すゞし○清涼冷をもあり分て之を清は物をすしくするを云ふ禮に冬温而夏
清とをも涼は輕寒と淡して初秋「比の清風を得るめし冷は清くして
寒けく氷あとはすくしを称す○淡拾遺に涼は如冷也名すしをを
とゝあり之り
すゞみ　納涼をいふすゞこをもとゝもるみ日本紀に暑を訓せり今京師
暑せるをゝ海ゆまての風俗は後世きを嫌へし涼床は遵生八牋涼棚は
天寶遺事に見ゆ後撰集に
加茂川に夏を涼すみて題を訓せるんをや夏をゝへすれ
○尾張伊勢に藁を紀をもぐみとをり出雲風土紀に神御穂須
須美命にり瘞宮にあるへし
すゝこ　日本紀に降をゝあり花炎をゝ進見に義なるをやまを戎兵を
をゝひるをゝや

すむ　進むとゝのみ新撰字鏡に選もあり漸前とゝむも同しすゝめるとゝ
つゝめるゝむこ○拙をまるにいつも人を勧めるゝも義皆通へり
そぐろ　源氏物語に多き組こまかなる蕭字をゝめるゝ辛字を列せり文選に坐字遊仙窟に
情字ハ多く慧ハつぶ〳〵注書に辛字を列せり文選に坐字遊仙窟に
漫字又不覺不意を訓をそぐろとゝ同義なるへしすぐろぐもぐろさてとい
ふも同しをぐろびハをぐろぶれをそぐろと通へり新古今集に
けゝかゝる色ゆゑさへ独とゝまるすゝろに八やとるゝかゝ
をぐ　神代紀に盪滌又濯をゝあり
すぐる　硯をゝ倭名鈔に八をみすりとゝ云ふ墨研れ象ゝ○朝野群載大
政官外記の條召拙の書或に左辨官下尾張國應早速進上猿頭硯貳拾
口とゝ云ふ○古左石石王子八職人可合見ゆ古法八櫻濱の沖にあり
文字の関石或八海硯とゝ云ふ三月三日潮ゝ取とゝ奥列をゝ海中に
見出ゝ三月三ゝ取とゝ云ふ石王子八毋波石王子山と白條ゝ清澄石八西
ゝ共ゝ云ふ山城と為ゝ

人ゝ云ふやうゝ世のゝゝ石ゝ共ゝ筆とゝ墨とゝつゝゝゝゝ
橋川石八豆班石也甲斐の国ゝ出雲ゝ出ゝ墨班石も同拙ゝ上野ゝ沼田石五
色石ゝ参河の銀ゝ石ゝみさゝ拙ゝ出国ゝ風石ゝ石ゝ拙ゝ出張河
乃葡萄石又播列赤石江列高砂ゝ赤石関筆ゝ石ゝ川石ゝ筑
ゝ出張水尾帝ゝ文房に供ゝ後西院帝御愛の拙ゝ水戸西山公ゝ銘
ゝ鳳足硯と号す西山公ゝ賜ゝ　御製
ゝゝゝゝゝ硯乃石ゝ齡ゝゝ代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
天硯八日向國宇佐演駿河阿倍川ゝ出○かゝゝ硯禁秘抄續千載集
ゝゝゝ錦繡萬花谷に硯字不見於經也且唐人只多以瓦為硯ゝ云ふ鎌
倉基氏有鄴瓦硯文有天禄形及周景王時所鑄錢文無之者非真今見在
當將軍家ゝ東見記に見ゝ東坡詩集に見ゝ龍尾硯八美濃國正法
寺に出ゝ兼良公蕉河記に出せり世に張ふ所の瓦硯志賀都府楼
橘寺大安寺等ゝ云ふ又赤硯ゝ陶硯あり○松藤硯八紀ゝ以平定英
金ゝ宗朝に賜ゝ附に硯ゝ清ゝ法帖ゝ受戒せ附

布施とすと云永七年正月ニ百萬遍ふり此硯を禁裡にけざんにいらおはらし
御湯殿の記にみえたり大和西麻寺ニも有り鎌倉覚賢寺にも有り紫色也
とも元氣精英此篆字有りとも云ふ又壬生忠岑此硯ハ壬生寺に有り
紫衣親ら硯ハ石山寺に有り紫色にして大和太宰に出る紫金石此類なり
紫金石此名雲林石譜にみえたり○近年参河の海より洇にかゝりて挙
ぐる大硯ハ米海翁珍蔵およし彫刻ありとぞ

すゞか

禁秘抄に鈴鹿ハ累代寶物也此号有異説未決其實と宣へり名目
抄に和琴名也建暦御記に與玄上同累代宝物也但毎年御神樂夜萬人
持之とみゆ梁塵秘抄に鈴鹿者神教之悠音也是橋板之時響妙律源平
盛衰記に琴の音此伊勢の国鈴鹿の山の名にてとみゆ文治六年奇有り
後撰

すゞか川 桐の古木は名木なし而も琴の音にかよふらん

是ハ蔡邕か焦尾琴の故事にてよめる成べし彩論に神農始削桐為
琴とみえてあり又金葉集雲玉集にもよめり今も處を宗谷といふ社より

西六町坂下といふ紹巴道記に今の街道の辨財天祠の裏の板橋と云
せる八雅なり往古の街道関町にありしを稲の琴橋と呼ぶ
川を鈴鹿川と云ふとぞ○鈴鹿のみそぎハ斎宮群行にありて彼の綿を
祭ありとぞ三子山にありし片山神社也とぞ鈴鹿の社ハ式に那久志理神
社とみえたる是なりといふ紀まり那久志理の社ハ名張村にありし弘安元年
勅使記に鈴鹿山鈴鹿姫坐路頭之北邊也といふ今ハ後次乃方角も遠
成りとや新勅撰によみたる歌あり此社のあたりなりといへり○
鈴鹿山の盗賊を蝦夷にて殺せし事今昔物語にみえたり世に鈴鹿の
山の鬼も盗賊なりといへりすゞか孫か家集にみゆ鈴鹿根の御也と定め
○牡鹿をもいふといへり鈴ハ鈴の緒に結ぶ鹿へし

秋山の霧に友呼ふやまとハせ鹿の哀しけにすゞか鳴なり

きぐな

七種の若菜に入て拾芥抄に菁をすゞなといふ蕪菁をいふなり
といへり又すゞしろといふハ今のだいこんなるべし薩摩にていふハ其国より
合ふ之れ芽なり

をぐるま　仁德紀に舟よりゆ私記には鈴をもてかざる故也と云と驛路に鈴をつけし紀ありと云り水彈あるは八彈鈴もそなへぬべし鈴をもて馬に付るなり

すべしろ　倭名抄に髻を訓せり小兒剪髮所餘也と注せり又額髮也とも云り今云前髮の事なり推代記に薄代の髮なるべし注に云けり

坊主とは結ばさりげとは相模に中山と云西出れる倭墮髻と云事也ろくさり万葉集に家の八歳をさる髮はとろへ八束小束はなれ髮まれは束を結くさるるや○七絃の琴に云あり八羅蔔也と也りさ小はを添しを家ちろ小自代家ゆへ一説に女菓に蒭其花如髻也と也もなるべしと也りさ小は髻代家よりなるべし又薩摩にて云ふは高菜と云田がらしなり○四條訓抄に毎月十日御拜ありて又御鈴代をなる鈴代は金銀青銅也

すがり　延喜式漬春菜料に蔓根須に保利六石菁根須に保利一石と見えり新撰字鏡に菹字をすがり酣字をもてりとあり八古へ漬物

乃名漑へし酣は字也に考婿也

すぐれ　平家物語に云ゆ進疾とかりそれは孟子に其進銳者と也

結ばるへ八結び字を用へし

すはら　祈代紀に踉蹌鈎をすはらと云り新撰字鏡に猖獗をすはらと云

訓せりすぐれの家なるへし古事記に須く鈎と見えり淤煩鈎に對し

也古事記は大小の家也

ゆぐれ　禁掖秘抄に按書殿に後に繩を結て鈴を見れと鈴れ

繩とは能人小舍人を召時に也と也り字典に唐制學士院深嚴懸鈴

索備警と見えり

をてはらひ　東鑑に御煤拂事と見て二水記に禁中御煤拂と也り表

中郎集に十二月廿七日掃屋塵曰除殘と見ゆ古事記に天之新巢之凝煩

八拳雀まて燒拳と也りて太古に伝へし

をぐめがく　厩風に也り雀に也りて風鳥也と也り風俗八蕃名なるら

でいちかこと云馬路古の地方に也と云喝闍陀人のもてる物を彼

地方此絵ハ風ハ事をうつせる必ゑがくもの也雌雄ともに翼あり紫青脚なく喉間ハ光毛ありて尾ハ長頸面鉢條あり雄ハ尾中央ながく雌ハ尾中央ながく来ハ白色なりとそ江寧府志ハ云る雲霧栃色嶋ハ尾中央ながく来ハ白色なりとそ江寧府志ハ云る雲霧鳥の形ありとも三才圖會ハ鸕鷀鶏也とも

ちぐめがゝハ　光孝の御歌抄ハ法の為ハ行ものかゝハ此名なり

御ものもうまへかすゝきことふハつゝめとちふて茶臺をと幽斎

ちぐめがゝとあるやうにも雀舌といふ良品の茶ハ名ゆゑあるやそれ

さへめそゝきの詞りやうにしてとゝ

ちくめのこゆみ　雀の小弓ハ義経眞ハ具揚弓ハ和歌法師

ちのゝあて雀弓張ものゝうハひとそ和りけるゝ

△すせ

△すせ　裙裾襴ものとゝめり日本紀ハ云ふ末退の衣なるへし

裾ハ襲ハ古りし兵部式ハ凡武官五位以上朝服皆聽著襴但立仗日不

須とみゆ○馬ハ也そすとゝハ四足とあらハ衣ハ也そハ四足ハ義也

ゝとゝ○呪詛の音ハ也ゝり松苔紙ハ也そ紙ハ也ゝ

すそり　神代紀ハ闌降とゝめり襴ハ云りハ衣なるへし

ゝそつき　日本紀ハ襴とゝめり裾着ハ衣なるへしすそハ接つぎとゝり俗

名抄ハ裳衫とゝそつけの衣とゝめり○新撰字鏡ハ髮とゝそぬゝずとゝ

めり喪服と注ゝり

△ゝそつく　万葉集ハ多集とゝめり密ハ也ゝりつまりて聒しきとゝり

巣抱の衣とゝ伊勢物語ハ也ゝれとゝ出ハ出入とゝ云ハ衣とゝも

て寄り兼堂集ハ人のゝそつくとゝもとゝめり○俗ハ臭ハ也へぐとすぐゝ

とゝ云ハ同しく也葉集ハ形とゝ也ゝふゝそつく白髮とゝ也ゝ

すぐし　倭名抄ハ簾とゝむ簀無ハ衣なり新撰字鏡ハ箔又箔とゝめり

篷箔ハ同し蜻蛉日記ハ也ゝるすゝも石とゝり玉簾芦簾篠簾なとゝ

めり千載集抄名ハすぐしかハ行又ハすぐしかやとぐしあり

すゝべ　神代紀ハ棄戸とゝめりとゝそべの衣奥津棄戸將卧とゝるハ遠郊

ゝり死骸とゝ也ゝる注ゝ

すだま　倭名抄に魑魅をよめり棄て祭られぬ魂の義にや玉篇に老物精也とみゆ○魍魎をよめりすだま石のすだまとよむと見えたり通俗文に木石怪謂之魍魎とみえたり

△すぢ　筋脉をいふ直路の義なるべし○人の系譜にすぢめといふは脉理の義をいふ又血脉をちすぢといふが如し○すぢみちといふは條路之訓脉をもいへりひとすぢふたすぢなどいふも一條二條乃義也○京師の一條二條郷村乃東條西條の名は国の事にて延喜式拾芥抄田籍部にみゆ源氏引歌に
世中はうちへふるしく淋りかなく短くおもふすぢかな

△すつ　棄捨をよめりさるともすてるともいへたる義てる義つ自他の字也飲合の酸味を生ずより出る詞なるべし去も上聲には古点にすとみゆ古事の時はすつるの倭訓は我よりいふ詞也○東国にかうぶると云又ふうちやると云関西りかなすといふ

△すで　俗にすでを白手といふなど

すでに　既字已字などをよめり業も同し既已已業業已などもよめり
過てまといふ義なるべし既往の義也日本紀に全字をよめるは古事紀の序に已因訓述者といひ万葉集に云印すてにおもひてふる事はといふ詞俱にことごとくといふ既尽也と注を已は未の反業は已然と注せり又既已を語末にすでにすなりとよむ史記にみゆ
すてご　延鑑に棄兒とみゆ金葉集にすてごをよめる
身にまさる物をなりけりみどり子はやらんかたなくかなしけれども
世諺に子を捨る藪はあれども身を捨る藪はなしといへり○旋覆花を老鸛蒜をもすてごみむといふ義ぶはなくてなけくとをてありといへり
すてかね　貞観式に凡知時以鼓示刻以鐘資仲卿節會抄に古人曰時刻鐘鼓以九相倍至三十六暮至三十六朝各打捨十以上真撃其餘天智天皇御宇始之朝参官人入外門其刻其時捨鼓進と見えたり今いふまでがねといふ今三ツをうつは時の数の是よりはじまるとぞ知るべし

△すど　簀戸の義すどの竹垣などよめり
すどり　万葉集に荒磯の渚鳥又入江の渚鳥又的形の湊の渚鳥とみゆ

ものゝ紀よ所ゝ多し○俗よ捷徑をいふハ直通乃路の義成へし二言集よ山ろ
ゆすとゝる行垣とゝあるもこれ義なるへし○齊民要術ハ巣を捕へそを書るを
を巣多とゝり

△すな　砂をゝあり洲よ生の義なり○すゝどゝもいふハ砂ゝ石の義なり新撰字
鏡よ磧もゝあり○鍋庭よ乾さすゝごゝと用ゝるゝ注釈なり
ものゝ　日本紀よ朴素又淳朴をゝとゝりすゝぐゝゝ
ものゝ　則乃即便輙曾載就斯遲還應等をゝありすゝぐゝ路也たゝぐち
とゝふゝ行知物語よつゝゝゆゝ則よとゝて常義物語よ若宮八幡ゝ
より寢殿よ出る渡殿よおゝてまゝゝとゝて則を因上意発下語と
注をゝそらゝばもゝゝてゝゝゝゝ用ゝる乃ハ説文よ曳詞之難也とゝあそこでと
譯して通をる義ゝ通して廻よ行る乃ハ婉緩よ即ハ緊急也即ハ爾雅
疏よ即今相近也とゝあゆ便も即也と注を輙ハ每事即然也と注を曾ハ
乃也と注す載ハ詩經よゝて就ハ俗語也又後世ゝ官府ゝ文書よハ皆便字
と用ゝる輙字を用ゝるゝとゝり神代紀の文法もまゝ掛り字書よ斯ハ則ゝと

ゝゝゆ意門ゝゝゝゝ時ハ登時ゝゝ義ゝ書之義集り
喜ゝゝんをゝゝゝゝゝゝゝゝ若ゝゝゝゝゝ葉なりゝり
○日本紀よ且字もゝあり所よかゝとゝゝよ亟ゝゝゝゝゝ載字と同し○
神代紀捕亡令ゝよ登字をゝあり續紀よゝゝゝゝ登時よ同し晉書載記よ
登加羅戮とゝゝゝゝり芥隱筆記よ房杜傳登殺用唐律即時為登即時殺
之也とゝゝり登即とも連用し博物志よ即日を登日とゝり○史記ゝ注よ
遲乃也とゝゝゝゝり○古事記よ爾をゝありゝゝゝゝゝゝゝ中と訓してゝゝゝ
爾乃と用ゝる義ゝ後のゝゝ
すゝゝゝ　沙鉢ゝゝ細砂を入て水をひゝゝゝゝゝゝゝゝ東山殿御餉記
ゝ双耳瓶とゝゝり法華經よゝふ白景盤の制も近し
△すゝ
△すゝ
△すゝ　日本紀倭名抄よ髓を訓せり説文よ骨中脂也とゝゝゝり新撰字
鏡よ骸をもゝゝけとゝゝゝり○今人脛脛をすゝと稱するゝ義なり難經よ

髓會絶骨袁氏注ニ人能健歩以髓會絶骨也と云て素問ニ脛痠痛甚按
之不可名曰脛髓病と云て云ふ可名曰脛髓病と云て素問ニ
すもる　悁狼拗戾のさまいふり侠客を髓振とも髓者ともいふ素問ニ或ハ
強字をかめり

△をちこ　三代実録ニ簀子と云り廂下ニ小ひさき椽をもいふり○山
槐記ニ小簀子と云ふり○延喜式ニ驛鈴傳符皆納漆簾子と云て云ふハ
箱ゆもいふか○簀子敷ハ内裏式ニ云て云ふり○簀子ハ下ニ椽と云ふ行と
盗行と云ふ廂下ニ渡まて繫縛せらるゝを云て名けり

△すハ　今苛刻なるをすハさびとみゆ苛くとをいふり○倍ハ倍ニ二言と
云ふ如ぐりいふハずりぐりと斬をいふ同し翁解會ニ倍ふ云ふ倍んばとい
ふり○諏訪ハ社ハ信濃ニ古事記ニ洲羽とみゆ今須波と云ふ也字
しを天平ニ信濃ハ郡の名ニ書或ニ南方刀美神社二座とみゆ上社ハ建御
名方命下社ハ八坂刀賣命也上すハの祭三月酉の日也廉の歌ニ七十五組ハ
ハ神祭ニ偽ふ別ニ肉を料理して盛てもの偽ふ下ハ諏訪ニハ廉を偽と

上ハ年中七年ニ成ハ祭ハ行ふ下ニ云ふ七年ハ一度大祭ハ行ふ日ハ申寅
の日を吏ふ〳〵用ふ色を洲柱と云ふ○姓氏ハ云ふ東鑑ニ見ゆ

すハま　洲濱ハかけり類聚雜要ニ圖式ハ水濱ニ洲と濱と云ふ象を造る
又今の海岸ニ云ふ物ふりと云て洲濱島蓬萊ハ蓬萊ハ云ふ
鄰字をよむハ海篇ニ水在石間鄰々也詩傳ニ鄰々ハ清激貌と云て云ふり
○式河内讃良郡ニ須波麻神社ハ中垣内村ニ○菓餌ニ同名ハ云ふり
見ゆ云て象と云ふり○ゆ云ふハ大刀子也と云ふ形を云て名く
○洲濱殿ハ紀伊名所旧跡ニ海部村ニ云ふり家系譜の別莊と
ずもえ　氣條と云ふ唐詩ニ云ふ直生の条如し○倭名抄ニ楚と云ふり万
葉集ニ楚取五十戸良と云ふ云ふもぐもえと云ふもぐらと云ふもぐらもぐらと云ふへし
貧窮問答ニ云ふ笞ハ笞楚ハ云ふ里長ハ租税を云ふ云ふ一説ニ良ハ長ハ
誤て里長也と云ふり舊讃通しかぐり宋潘大臨ニ人の新詩あり中ニ
昨日得一句忽催租人至遂敗意と云ふ杜詩ニ今彼徵斂者迫之如火
煎と云ふ同意也○日本紀ニ笞杖を云ふ云ふ云ふ云ふ云ふ

もぐ糸　倭名抄に昴星と訓せり神代紀五百箇御統玉と竟宴に歌に
なもぐるもといふは星の形勢をとて名づけるなるべし儀式帳に天須婆留
女命ゆう○ぬなとよむつゆ星とよび亦ぬは九曜に星といふ
もぐ　延朝式に楚割と書りすなわち魚と云ふ也倭名抄に
魚條とあり細枝をもへは楚と同し今そうとよむは文字よりて誤れる
なり今は刺身細作のかし鯛楚割鮫楚割小武に見てこう東鑑に鮭楚
割と作く本盛綱の子息小童とて頼朝公に奉りし時かの折敷り自
筆を添らるもて

待えてる人のおさけ小すとやりけるうなくるあるをさう小
こハをこはゆ兼川をそけるのあるら此時盛綱鮫を領しるをとをてなり
鮭ハ紙鮫を最上とす
すハのうを　伝説の諏訪の湖をいふ下諏訪より上諏訪ハ三里満ち周
圍六十七里廿一歩といふ氷の上にかゆひちとひ氷に橋をいハ多をの
て氷ちりぬるハ年ようり一尺二三寸ようるをいふ初め凍定る日を御渡とも

事ゆうて氷上よりあるる大木大石等氷に凍るを見て又神光とも云ふ狐れわ
ゆう初るといふ渡ハ大ようの渡ハ多ようる氷をけんとする時も亦渡あるて渡ハ人も
かよふ尺渡河流渡百ようる
すハの海氷に橋ハ多早ふる神代とうてをるなりうり
神渡物よすハの明神乃一ようとも女神の日と云ふ明神の日ようるに
ひとそこそハすハの海ハ氷て張人もちうとうし結るをれつうとうり氷神と
ようるをいふ氷のようるて五ようる昇をとうとうり人馬をれ渡る
手絶のかく氷を穿ちて鯉を摘るを宛源を井に如く漁者ハ氷を穿て假屋
を設くといふ東遷よ信濃諏訪社泥湖大溜養倉紅等出沢片時之間如
消而失とうるとうり○西土に信列山上ふ鵝湖あるとて張人諏方ふ鵝
湖とせり○狐のようり初ようを文選に狐氷とうり朱子語録に狐性多疑
每渡河須氷尽合渡若聞氷下有水聲疑不相渡恐氷解也故黄河邊人每
視氷上有狐跡乃敢渡河とうるとうり
△すびつ　炭櫃の聚炭を火函とうり

△すふ　吸味呪詛をとなりとあり又たとへばそそらけり咂も同し
霊異記に噤もあり
すぶ　統總をとあり又屈伸とも云ふ屈るを云ふなり又律は古忘
り管もあり管轄也
△すべ　皇とあり大一統は天也と云ふ○所をせんすべなと云ふ光仁
紀は詔を言むとべも所をせんもべもすとあり今もすべはなりとも
なを見これもべきは天をもとへすと方系集り為便無とあり古事記
所可為ともあり
すべり　夜の御褥とあり又鴛鴦はをしとあり
すべく　凡都率類統總なとのみ注書に無慮もあり亡慮も同し
吟味なとも云ふ又慮一字をもあり師古注に慮大計也とあり○史記
乃衛青傳の索隠に最謂凡計也とあり皆字もをべてとあり
あり全も詩家多くすべての義に用ふ渾も訓へし俱も皆也と注す交も
書は注に非一之義とあり文選実録に都盧とあり語録解義に都盧

を背而置也とあり
すべなし　義集に窮又无之とあり俗は諸に方をべ匿などあり
をべらぎ　天皇をもとり統る君は天をへしをもとるぎとあり○流号
を陽成院より始る安徳天皇と後醍醐天皇は却て世は乱よりそを事はし
をべは　皇親とあり中臣祓に皇睦も同し祝詞中に皇吾睦とあり
とう皇我宇都御子とあり主同しすめむつとあり又すめは統る言睦は御
親とも義と義集りすめら朕とあり主は天すめらむつとも屈し
又みおやともあり神代紀に皇祖に祖とあり俱に外祖と称す外戚と皇
親とあり宗室に對しる須そ明律にあり○継嗣令に不在皇親
之限とあり又内親そ宗室とあり
をべらか　女中の髪にあり大をべらかし中をべらかしをべらかし天武天皇紀
制に婦女髪于背猶如故とあり主髪猶如故とあり是と無住は流に男は髪とあり
とあり女は下へ垂下は是陰陽は形也と云ふ今をべかとあり中華古今
注に倭墮髻とあり是なり

とべからく　須字とあり天神氏の説に大江朝綱は撰ぶ和漢切韻なり
又讀字は例に入らずとべからくは何くとべしと讀書古点と今とべらく
何くとべしと讀は雅仁源氏説書は源氏物語なりすべらくとは字なりと
考へしに人の對に事とをるなりかくはめくせよと示せる字書なり
須意所欲と見てとりとべからくは云葉を略してとべしと讀るは
つらつらかんず點例に倣ふとなりみて可しとなりでもそなるふうり
といふり日本紀にも須明報（クハシマタマヒテ）まくさ須褒賞（クハシオメタマヒテ）の類皆はのみを加へ又とべきとも点
せり流れ苔に八とべからくとは云をいづくひを源とをへしとなりとなり古き訓點
に可謂已とあるべからくとはもとべらくとかるなるべくふ同し

△すべむ　窄字とあり未答むの義なへしとがめるとも云めるなむとがる
と同し方丈記に朝夕とがきを塞と和てへつらひたるとも云なり

△を海　播磨は須磨と赤穂は坂璫とかけり在原行平卿は事人に行
鹽釜とを下河辺所司沙平も平家追討の賞に須磨明石は勝景あるとをて
播磨国と得て守護職なる事東鑑に見なり古今集に行平の田村は御

時事に行なうて接津国すなはちなる文徳実録に是に羅人なる
を業平の罪せらるる縁坐にて須磨へ退去て住まりしを云べき事をそれて
かくるゆやはらん後撰の詞に業平身はうせぬれどなほ住けるとを
なり○京師須磨の町は九陌はしてて五辻の次今出川乃上と
を海　式に洗人とあり桂草紙に海とをあり栄和ふ刀自を海とあり
和泉式部日記に海を壺とも云源氏にみるなといふ若はめ日中
行事に海湯なとをとるなる者なり○海は汁樽中に云へ
すまひ　古事記に逗留は字とあり伊勢物語に海はなり奇は沒知なり
ふるはもまひふるはどとなり遊仙窟に推字とすまふとあるも同し
つの海とすまひなりといふるもなるとなり海を
紅風とすまひとすまふ女和歌いくとひ神色に於きあり
今も人の氣象をいふすまを海をいふ色なるへし牛は梨はかりて進まぬを
すまひ牛といふも同とて○捕力とすまひとなるも右の義と今は世に世

なりなして廟撲は音を呼といふは非なり村上帝は天暦四年七月七日を相撲節とし雲圖抄に云て相撲の字法華經に云く相撲とあるは日本紀に云く角觝也○すまひとりとすなはちとは出るは字治物語に云て國史に捻脊力人ともまひとりとあり今も西國にすまひといふ是なり○相撲記に白手無髪総角最手助手小比名別に云又立合相撲長に云と云ふ相撲長は今いふ頭取なり立合は今いふ行司也内裏式に白手勝則奏乱色不奏舞家手勝則奏乱声及舞といひ倭名鈔に胡蝶樂を亭子院童相撲時山城守藤原忠房所作也といふ童相撲は三代實録に云ふ清和の時に始る又七月に内取召合抜出等は名目にあり○相撲立は詩歌二十番に藤基俊の撰也詩に云て左とし歌を右とす○古事記の力競に取成立水亦取成劔又如取若葦を云ふも今いふ手は名目は紀に如へしとは手といふもお比文に取其御手とあるに据とある也○住吉日本紀万葉集にあるはまひと及みと續紀宣命にまひとりまひとあり

なりすまひと云て俗語は比多のよすがの海は事し

まひとは多なりへし松は小禪也注語抄に云水子と云とあり方言注に

袴而无跨謂之禪と云てあり

墨 すみ

墨は黒淡黒まて鹿薄多し物續古今集に墨染の袖と云ふ

墨は佛を表する古今著聞集に後白河院熊野詣に義代は家を

國司松烟を捧て供奉を重とすと云て云ふ

朝野群載に伊與國墨讃岐國墨新猿樂記には淡路墨と云て我邦の

製高麗の俗物へしと推古紀に云て南都正倉院の古墨は新羅柳家

上墨と出り西土小も松烟墨は高麗より献ず事云て一挺といふ

事唐秘書省式に云○墨を以て沸立る耳のあと入る事は大双紙に云て

云り○炭は墨より出る語如へし象列傳に云つぶき炭は桜炭と出り

拾遺池田炭ハ本草ニハ櫟炭也かゝ炭ハ塗師のろくと云紙屋ととのこ
かゝ紙しみ又ゑびす本也と云り茶疏ニ堅本炭ハ云り○けぶとゝ　すこ
とゝめる八丁仙芝詩ニ獸炭然金爐と云てゝうちも炭ハ柏子庭ニ詩ニ
爆炭と云てゝう○吏本集ニすみ代車と云てゝうハ炭を積る車ゝ○名茶
小純ゝもむハ音也と云り○隅角をもむハ背ゝ代ゝ云ことゝ云り出雲そすゝ
ともすゝもゝとも云り○箱の隅ニさゝをみまゝもゝとゝ云るゝ物ニ云てゝう
すみゝ　菅家万葉集ニ陳ゝのゝ住詐代ゝ云へしゝ云ゝ代ゝ云ふ同しつ
ひのゝをみゝハ陳ニ住ゝゝるゝゝゝ
すみぞめ　墨染ゝ僧衣ニ云り慈鎮の歌ニ
何ゆゑニ捨けゝ身をゝくゝ墨ゝ染ゝ衣ニゝをみそめ代袖
○凶服ゝも云り赤服ニ錫紵と用ゝ今義解ニ錫紵者細布即用淺
墨染也と云てゝう又万葉集安積皇子薨之時乃歌ニ白細舍人ゝゝひ
てとゝひ白樣ニ服ゝうゝてとゝひ又悲傷死妻歌ニも白細之袖さしかへて
と云ゝとハ白衣と用ゝる時もゝうしゝゝ○万葉集ニ墨染の名ゝつゝるハ

貴ゝゝゝゝ墨染の名ゝも墨染代ゝゝ液の心ゝゝる名ゝう
○衣服令ニ家人奴婢橡墨衣と定あらゝゝゝる鼠色なるへし
すみのえ　住吉也神代記ニゝゝえハ代古刊古事記の墨江も同し
万葉集ゝも墨之江と云須美之延と云ゝ云ゝ
田氏説ニ住吉ハ紀ゝ守り給ゝゝゝ古記ニ云ゝ後世六百年ゝ後の
事ゝと云ゝゝゝゝと素尊の清ゝの心を得ゝく八雲代歌ゝ愛するゝゝ
△筒男命と其德ひとゝ見給代神ゝ崇ゝ所也津守氏助ゝ奇ニ
敷嶋の道守ける神ゝゝゝゝ神垣ゝ
○住吉城ハ相模ニ
すみやう　神代紀ニ急字速字靈異記ニ遄字ゝゝ進やう代義源
ゝ新撰字鏡ゝ倫ゝもむやけし遽ゝもゝみやぐゝゝ亟も師古
急也と注ゝ
すみぐゝ　古今集ニ墨流の歌例ゝゝも云り檀紙扇紙等ゝゝ
△すむ　澄清ゝもむハ直視代義ゝと云り○住ゝもむも山ニ澄ゝゝ

居住をトるよりいふなるへし不潔則神不處といふか如し神代紀に息にもよめり○湯をよむも事遂くと注せるハ濁りなきをいふなるへし澄清天下といふか如し

△すめらみこと　天皇を申奉る統る尊の義宇宙を統御ましませハの謂之張九齢文集にも日本國王主明樂美御德とみえたり儀制令義解に據に此文字ハ義かなより書せしまゝに用るなるへし御字によれハ王を須るへしともいへり○神武紀に皇輿を訓せしハ義訓也○神皇正統記に冷泉院より天皇の号をやめられしと見ゆ

△すもり　倭名抄に卵をよめり巣守の義也万葉集によみたるハこれをとりめのとよめるハよしなき謬訓也　緑兒之為社(タメコソ)乳母(オモ)者とよめるなり

源氏物語の詞なり

物ことにれこそかくさまにあとさ乃て数すもりにいぬへき

抄に鳥の巣に卵のかへらてあるをいふとみえたり○源氏早帖に見ゆ

おかつかなき事くと清か納るる鳥のあるをもとりといふとみえたり

△すやき　坏樸子といふ陶焼の物といへり文芸をうけぬをもてすやといふなる

唐し生瓷なとかけり

△すゆ　倭名抄に渠をゆ也ゑる文ゆゑ新撰字鏡に饐をいひくさるとと

よめり

△すよ

△すら　此ちら詞すらといふ日本紀万葉集に尚字副字をよめり数する氏するなすらもなしみえよりそれまて此字を猶も同し荘子に形全犹(スラ)足以為尓(ルヲ)とみえたり文にちらとよむへきぞ猶尚とも尚猶とも用みえたりちらハ凡て其下に付てよむハ是も万葉集に柔膚(ヤハハダ)尚(スラ)乎山道尚(スラ)乎虫尚尓鴨尚尓なとよむへき事も霊異記に國司をもさせて我ちらふもとにみつけたり○俗語のちらてもちらかくちらやまひすらみすらひらひあといふハ實ハそれ事となくて假そめなるにいふ詞なりそちら此義虚偽をいふなり

△すり　倭名抄に簏をよめり簀より出る名なるへし行旅此具之万葉集にもすり袋ともよめり今も行旅の具に竹篋のあるをすりといふもの

ひり鐙磨と也といふ○攫徒とも云ふ盜人の物を掠めるを云ふなり
奪し案堂案り旅人をそそのかすあひさを絡る也
旅人をすりもとる也○沈とまくいふ絲山のこと
一説に梵語也といふは翻譯名義集に朱利草秦言賊とあるを明律に掏
摸とあゆ擇便取物曰掏以手取物曰摸といふは巾着切も同し白晝搶奪
といふは所謂ひるとんびなり白日撞とも云ふ上絡はてさぐりとの
也りとも　中右記に鳥羽院時禁民間服摺衣とへいはるはけるものを
宿よすりつけるなりそ山藍よすりて衣をぬぐもの也拓すれは衣
ぬぎ紀とそすれは衣萩を染ぬり一入ぬりとみ衣をとひ庶列に摺絵を
とあるとあるものは色ぬりや絵りぬるん西土諸蕃
りはかの事をそそぐ○摺衣の図倚と諱名せるは長崎高本氏の女也
能書ひろ志はしのもり衣を拓はれりひれをみるなり
△すり　為をあり古事に為謂と通し用さり○磨とあるはもとくくれ
衆なるへしもて先と出すは研也鶯も石をすると也り研も同し○摺も

磨の衆なり山をとはるとあるを方言第五に摸は手して拭と也ぬすむ抄は
もとをとすりり○髪を剃をいふはそるの物語抄へし一説に梵語なりと
いふは周羅此云頂髪に据り
するが　駿河をもむいたゆるすむとをとり天井川富士川等に出するとき
川ゆるをもそ第をに
する也み　白氏文集に匹如身後有何事とみゆ匹如とをるすとをあり
洗練苦に人此をひをるすみなるを沙石集にするをとをいふは人の一物
をもとたで行負也下郎は主へてすつをとをいとを栃氏此に匹は匹
支の衆也とをとを韻會に匹譬也唐詩に匹如元是九江人蓋譬徐訓
猶匹也とをくをりかくをいは匹如のかをるを用ふる○頼朝乃馬に出る
は磨に雲と出をり是梶原景季に揚ひ馬也とあるをりしをや新古帖に
をるすみをまりををかるを為磨とをあるも磨雲此衆と世俗に出る源
海の雲り出とをり○磨に雲石をを雲田川に出り高砂を磨に出とを
拾ひ絵ひく

[illegible]

△すれ

△すろ　櫻櫚木也今ものろと云り　按草紙よりもめてわろき事共もの
ふるすと云り夫本第り
[illegible]

△すな　居ものふもぐふる共ものへしと云ふ倒ものすうすも
ところろりるる及ものふう也○舟のもるろハ膠とろろう○畿内
りぬどかるる宮ものへさぐる俗馬はへこまる長崎はらん

ものりはねざりとの
すもぐる　埃嚢抄ハ居ものはこ倉ものはこ吸ものはこ共なへし今俗
ものもぐるとの

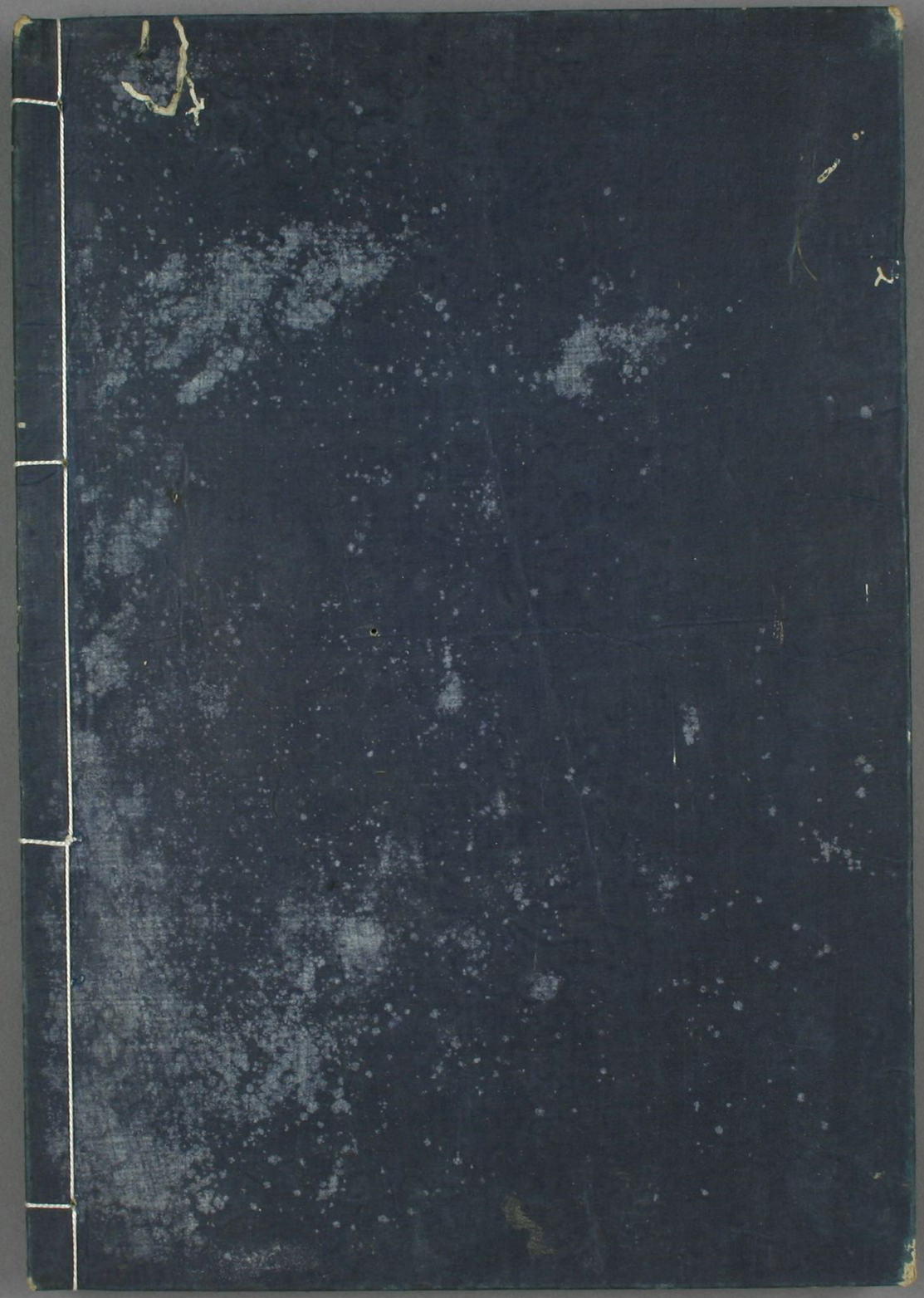
△すねもん　水繰ものり水ハ浮ものる若ものふ○ものけ水繰ものこと
良基公嵯峨野物語ハ居ものり今俗ものけ水繰すびものもの結兵ものもぐ
ものもぐものり皆ものすして初ものもの物語ものもの　○列子ハ人有濱河而
居者習於水勇於泅説文ハ泅浮行水上也熙朝樂事ハ泅兒ものもの弄潮
心同事文類聚ハ戒弄潮の文ものり

△すも　居ものもぐすもぐものもの居也神代紀ハ置ものもの

○まものもぐものもの居ハ居の家なものへし季ものもぐ抄ものもの同事○家後
乃祝詞ハ高山の末短山の末ものもの古事紀ハ深山の末ものもの
ものもの對事ものもの上ものもの末ものもの巔末共家ものもの○日本紀ハ陶ものもの居の家ものもの
家ものもの第り哭泣の神社ハ三論すものもの居ものもの陶器也すものもの居ものもの陶器ものもの
共ハ陶器也すものもの居ものもの陶者ものすものもの居ものもの陶器ものもの○すものもの居ものもの陶器

八旋盤也史記の注に陶家名模下員轉者為鈞とあり○陶者五郎大夫
なる者後柏原院の永正中に明に入明の正德年間也四明李春亭の親墨
り詩送居士五郎大帰日本敬將玉帛覲天顔回首扶桑香渺間云々とあり
○假髪をもちゐる俗名抄に云くとあり新撰字鏡に髫とかみのすゑと
あり求れ髮なるべし今はそへと云り副の髮なるべしかみの髪髪皮也今琉
球より出る者を上品とす其髪髪黒くしてもつぱら故也と云り類聚雜要
五節理髪具に末額髪といふも是なるべし○上總國の郡名に周淮と云
てもちゐるとあり又すく美音あり○繪後河野邪陶村の工八
陶器に八藥に用ゐて可しとあり
すゑなり　末世の髪を結ぶ也
ちゝもへよたちかりて緣のこまをかくへし瓜のすゑなり
伯村八相樂郡に繪馬樂に背の伯のわりの瓜作とあり
すゑぐすり　金匱要略に坐藥とあり千金方に八坐導藥とあり
坐湯とあるも同事也さいぐとあり

ニセ　ニセつひとる　万葉集にあり足の紅をとる末橋なのあなりもをつみあす
ハ出るとも出るとあるの末さくなとあるとけハつ花と思ひしるとあり
一ゑ　ゑまつやま　古今集陸奥歌に足の坤元儀に末松山中松雪のな
乃松山とそ三年に成り若男女ともに末松山とそ云しかとも沼
の波あんはそこ波をあるこ雪ひしらす沼とそ云ることとあり
源氏に末松とゝみ伝説集に末松中にあり中の松山也
多賀社邊のわりまで也と歌枕と名く末松山八
をもハけ山の尾に神乃井のわり也山とそハ松の浦高なるへし山
り松ゆく松をかゆく結ぶ事八聖武天皇に歌に松苗を植りこま
色ゑわそこあるらゑてあ沼に松あるの色たけ高の松をさすに
ゑりこ末松山とも天平寶字に歌の松あるとゝ思しとゝ侍し
とゝ云り○
ちゝりこゝるみに神を奉りて末の松山沼こそとゝ
漢書に色交者親色衰而絶とゝり

△すがろ　蓑毛草巣草共云

淀藩